
クサリ

キイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クサリ

【Nコード】

N8646B

【作者名】

キイ

【あらすじ】

まだ、僕が幼い頃に母さんが言った。『人は何かを連れて生きていく』と。中1の夏、僕は、その言葉の意味を理解するチャンスに出会う。

0. プロローグ（前書き）

この話は、突発的に書いたもので、おかしいところもあると思います。そういうところがありましたら、指摘していただけると嬉しいです。

0. プロローグ

人は、空を舞うのがとても下手で。自分の意志で舞ったとしても、そうでなく舞ったとしても、結局下手で。

なんでこんなことを考えているのかというと、今、母さんが目の前で、不本意ながら酷く下手に舞っているから。

「人は、何かを連れて生きているの」

そう言った母さんは、すごく綺麗だった。

「その何かっていうのは、」

優しくて綺麗な母さんが、僕は大好きだった。

「人によって違うのよ」

今、こんなことを考えている場合じゃないことくらいわかる。でも、目の前の光景があまりにも突然で、あまりにもゆっくりと流れていくもんだから、僕はそんな風に考えてしまう。

「まだ、解るわけないわよね」

頭の中で、母さんが微笑む。

そりゃあそうだよ。まだ、その時の僕はすごく幼かったんだから。でもまあ、成長した今もあり解らないでいるのだけけど。

今、母さんが連れてるものは何なの？

車と母さんを繋ぐ、ソレは――……

1. 優しい顔で

「痛っ」

「はい、我慢我慢ー。よし、終わりっ」

「なんかすいません」

「いいのよ。お茶入れてくるからゆっくりしててねー」

僕は今、全く知らない人の家にいる。

十分位前に、僕は車にぶつかられた。速度は遅く、ひくというまではないかなかったが、その衝撃で転び、膝を擦りむいた。

車は、ひき逃げならぬ、ぶつかり逃げをした。

「痛い。最悪だ」

なんだか気力を無くした僕は、その場に少し、座ったままだった。そこへ、この家の住人が通りかかり、声を掛けてきた。

ここへ来るのを僕は丁寧にお断りしたのだが、半ば強制的に連れてこられた。そして怪我の手当てまでされた。

「はい、緑茶でいいかなー？」

「あの、僕もう……」

「まだいなさいよー。どうせ学校さぼりでしょー？」

「……」

凶星だ。でも、僕はさぼりというより、登校拒否をしているから少し違うのだけれど。ここへ連れてこられる前から思ってたけど、僕はこの人がすごく苦手だ。僕の意見なんかお構い無しに話を進められる。

この人は嫌味なくそんなことをしてくるから、余計苦手だ。

しばらく、テーブルを挟んで座っている人は何やら携帯電話をいじっている。そのせいで、すごく静かだ。

部屋を見回す。そう言えば、この人が僕を見付けたとき、両手にスーパーの袋を持っていた。袋の中には、一人暮らしとは思えない量の食材が入っていた。

主婦なのかな。

もう一度、部屋を見回す。子供の物が見当たらないかぎり、夫と二人暮らしだろうか。

ここまで考えて、僕は、はっとした。なぜここまで他人のことを考えているのだろう。僕にしては、珍しい。

「おかしもどーぞっ」

いつの間にか、携帯電話をいじるのをやめて、おかしまで用意していたみたいだ。テーブルの上に、スナック菓子の入ったお皿が置かれた。

僕はあまりスナック菓子を食べないのだけれど、ここは少し、食べとくべきかもしれない。

「あ！あいすもあいすもーっ」

出しすぎだ。いくらなんでも食べきれない。

「ハーゲンダッツよ。今日は奮発しちゃう！」

「はあ……どうも」

勢いに圧倒された僕には、それしか言えなかった。

「そのかわり！少しお話ししましょう！」

ああ、帰りたい。オハナシなんて、めんどくさい。僕が学校に行かないのも、話し掛けられるのが嫌だからという理由なのに、こんなところでオハナシなんて。

でも、ハーゲンダッツのグリーンティーは僕の好物だ。食べ終

わるまでなら、オハナシも、いいかもしれない。

前の人は、僕の了解を得ずとも話し出した。

「んー、そうね。じゃあ、なんでさぼってるのかしら？」

「……めんどくさいんです」

「その答えからすると、毎日行っていないのね？あ、じゃあ今話してるのも結構めんどくさいでしょ？」

「はい。……あ」

すらすらと話す、そのペースに乘せられてしまった。つい、本音が。

「あっはっは！いいのよ、素直っていうのは良いことよー」

そっかあ、じゃあそうねー、と前の人は次の質問を考えているみたいだ。

ふと、長めのスカートからのぞく、前の人の足が視界に入る。足首のあたりにはあざがあった。ぶつけたなんてもんじゃないくらいのあざだ。

僕がまじまじと見たのがいけなかったのだろう、気付かれた。

前の人は口を開く。

「これ？夫がやったのよー」

微笑みながら、

「同窓会に行ったら怒られたのよ」

足首を撫でる。

「でもね、」

酷く、愛しむように。

僕には、まるで解らない。前の人の、その、気持ち。ただ、アイスが溶けてゆく。

1. 優しい顔で（後書き）

恋は盲目。
ならば、愛は。

2. 辿り着いた答え

「色んなひとがいるんだな」

夕方。僕はあの人の家から出て、家路についた。
あの人の言葉を思い出す。

「でもね、これがちょうどいいの」

——その時、僕はその人の足首に、あるはずのない足枷が見えた。

「ちょうどいい、かあ……あんな立派な足枷つけて」

ふと、母さんの言葉が頭の中に浮かんた。

“人は、何かを連れて生きているのよ。その何かっていうのはね、
人によって違うのよ”

……そうか。そういうこと。

つまり、あの人は人の束縛を連れて生きているんだ。

僕には、人の連れている“何か”が形となって見えらしい。なぜ
見えるのか、その原因は、思い当たらないのだけれど。

母さんが事故に遭ったあの時。母さんの腰には鎖が見えたんだ。
それもきつと母さんが連れていた“何か”だったのだろう。ただ、
母さんが何を連れていたのかは、まだわからない。

でも、言葉の意味が解って、やっと母さんの死を心から受け入れられた気がする。

一通り、整理がついた所で疑問が浮かぶ。

僕は。僕は、何を連れて生きているのだろう。

自分の手足を見る。

すると、手首に鎖が。なぜ今まで気付かなかったのだろう。

その鎖の先を目で辿るが、随分と長く、先が見えない。

このまま鎖を辿りたい気分だけれど、もう疲れた。それに膝の傷も痛みだしたし、今日は帰ることにしよう。

翌日。

珍しく早起きをした。まだ七時じゃないか。いつもの僕は、学校へ行かないため、お昼頃まで寝ているのだが。

少しだるい体を起こす。

手首の鎖が視界に入る。

今から、辿ってみようか。

取り敢えず、二階の窓から外を見る（僕の部屋は二階にある）。すると鎖は学校方面に繋がっているのがわかった。

もしかしたら学校周辺に何かあるかもしれない、と考えた僕は、

制服の学ランを着る。今は七時二十分。登校時間内のはずだから、カモフラージュを。

七時半。家を出る。

誰にも気付かれないように、中身が空っぽの鞆を持ちながら。

歩くこと、約十分。学校近くの十字になった交差点に着いた。何度もやるように、僕は自分の手首から伸びる鎖の先を目で追った。

すると、見えた鎖の終わり。

「ああ、そうか」

僕の鎖の先には、

「そうだったんだ」

鎖の、終わりは——……。

2. 辿り着いた答え（後書き）

読んでくださり、ありがとうございます！

最後は、読者様の想像によりこの小説のカテゴリが変わってきます。
恋愛にもなれば、ホラー（?）にもなるという。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8646b/>

クサリ

2011年1月25日14時42分発行